

Monter HunterXX 黒龍
伝説の巻 終焉の章

マスクまる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

MHXXの世界で送る、黒龍に挑む4人の狩人《ハンター》の物語。第二章

グロ描写はないと思います多分。

※この小説は「伝説の章」の続編です※

まだご覧になっていない方は先に「Monster HunterXX 黒龍伝説の

巻 伝説の章」を読んでおくことをお勧めします。

目次

第一章 運命を解き放つ者 | 1

第二章 怒れる邪龍 | 9

第一章 運命を解き放つ者

ハル達四人は、その後もミラボレアスについての古文書の調査を続けていた。少しずつ解読を進めていた。

そして、終焉の書に紅龍の存在を発見したのだった。

『紅龍』だと。」

「黒龍のはずだろ。」

「どうした、ハル。」

「ユウキさん。これ…」

古文書の一片を見せた。

「これは…」

『その怒りは大地を震わし、天をも焦がす』

その名は、運命を解き放つ者を意味し、数ある伝承の中ですら幻の存在として扱われる、

伝説の黒龍をはるかに上回る「災厄の化身」。

その名が残っている逸話や文献自体が皆無に等しく、現在判明しているのは、断片的

にのみ記されているその姿と、「紅龍」と呼ばれるという事実、そしてこの龍が世に降り立つときに起こるといふ、計り知れない厄災の存在のみである。

「紅龍」と称される通り、全身は闇夜に流れるマグマの如き禍々しい朱色の甲殻に覆われ、

頭部には紅く光り続ける歪な角を戴き、背には大地が胎動するが如く脈打つ

紅蓮の翼を誇る。

「災厄の化身……」

「確か、どこかの伝承では……そうだ、焰の禍と言われていたか。」

紅く発光する鱗は、紅龍の激昂に際して更なる輝きを放ち、周囲を朱に染め上げる。「焰の禍」とも称され、天を衝く怒りによって終焉を呼ぶとされており、血染めの鱗に身を包む紅龍が獄炎の大地にその姿を見せるとき、世の空は緋色に染まり「終末の時」が訪れるという。

また、とある文献の中で、紅龍は「怒れる邪龍」と呼称されている。

そして数少ない資料によれば、紅龍は何者かが極限の怒りにより紅く染まった姿であるという。

この世界に於いて、邪龍と称される存在、そして世界を滅ぼすと伝説に謳われる存在は一つしかない。

黒龍ミラボレアスである。

「要するに、災厄の化身は…」

「極限の怒りに紅く染まったミラボレアス。」

「それじゃあ…」

「いや、それはないだろう。」

リンの言葉を遮るようにユウキが言った。

「現状、ハンターズギルドでは紅龍をあくまで黒龍とは異なる個体であると定義している。」

上で述べた事実が示されてからというもの、その存在を知る極一部のギルドの重鎮たちの間では、本種は黒龍が激昂し赤く染まった姿である、あるいは火山で力を蓄えた姿であるなどとまことしやかに囁かれているらしい。

「だが、ありえないわけではない。」

ユウキは知っていた。ギルド内でも様々な憶測が飛び交ってはいるが、黒龍と紅龍の関連を示す何れの伝承も、この紅龍が災厄と称される黒龍をも超越した存在であることを肯定している。究極の憤怒により覚醒を遂げ、全身は燃え盛る炎よりも鮮やかな紅色に輝き、その鱗や外殻は尽きぬ激憤を体現するが如き灼熱と獄炎を纏うといわれる紅龍の存在を。

「これが事実とするなら……いや事実だろう。どちらにしても、危険なのは間違いない。」
これらが紅龍が黒龍以上に危険な存在であると言う事実を証することに疑いの余地は無かった。

だが、これ以上の情報・伝承は殆ど存在せず、その存在や生態に関しては黒龍以上に不明瞭であり

近年、ハンターズギルドによって解析に成功したとある古文書に書き記されていた謎の龍。

曰く、紅蓮に燃える劫火の化身にして“運命の戦争”そのもの。

「運命の……戦争。」

「ミラボレアスの存在が確認された以上、否定はできないからな。」

戴く天衝の角は極限の怒りに染まっており、それは古より定められし宿命の証のしで、破壊と再生を繰返す不滅の証として畏怖される。逆襲の念に煮えたぎる凶悪な眼光は対峙する者の精神を蝕み、鮮やかな紅焰の翼は大気をも焼き尽くさんばかりの熱風を巻き起こすという。

「この古文書に書かれているのは、ほぼ100%事実だ。」

炎やマグマを自在に操り、歩みを進めるだけで大地を焦がすとの記述もあり、その怒りが頂点に達した時、近づくもの全ては灰燼に帰すとまで謳われる。また、予言では最

果ての地に赤き凶星が降る時、天翔る厄災が訪れると語られており、かの龍は天地から凶災を呼び寄せ、世界に終焉をもたらすとされている。

「運命の戦争」という不吉な単語から、ミラボレアスとの関連性が示唆される。

「戦わなければならないだろう。」

「戦いましょう。」

「そうですよ。」

（そうだ、この戦いは来るべくして来たものなのだ。それを、受け入れなければな。）

また、出現を預言されている地の特性から、特に「紅龍」と深い関係がある可能性が高い。

しかし、件の古文書以外にその存在について触れた資料などは確認されていない。そもそもミラボレアスと密接な関係がありそうな存在、そしてその資料などは、少なくとも世間の表舞台にはまず存在していないのである。

それ故にこの古文書に語られる龍に関しても不明な点ばかりだが、

古文書の予言が真実であるとすれば、その脅威は計り知れない。

奇しくもごく最近、古文書に記された条件が満たされようとしていると一部から報告されており、ハンターズギルドでは秘密裏に事実確認と調査を行っているらしい。

（ギルドから派遣された調査隊からの報告は無い。すでに全滅したか。）

「戦うとしても、今の俺たちの装備じゃ討伐なんて出来ないんじゃないでしょうか？」

「確かに。今の装備のままじゃ勝てないわねえ。」

「ミラボレアスとの戦いだって、偶然のようなものだったし。」

「確かに。」

リンもそれに同意する。

「そうだな。…確かに今の装備では火力も防御力も不足している。このままの状態で討伐に向かったら、確実に死ぬだろう。」

「だから、なるべく早く早く装備を整えて、討伐に向かう。」

「なんの装備がいいだろう。」

「古文書に書かれてることから察するに、火属性でしょうか」

「そうだな。攻撃属性は火で間違いないだろう。火属性の耐性の高い装備がいいだろう。だが耐性だけが高くても駄目だ。」

ユウキが言った。

『『防御力が高く、尚且つ火属性耐性が高いそうび』ですね。』

「そうすればこちらの勝率は格段に高くなるだろう。」

「だが…」

ユウキは顔を曇らせながら続ける。

「こちらは、相手の行動をよく知らない。装備を揃えても確実に勝てる保証はない。」
「つまり…」

『クエストの中で、行動を見極めて戦わなければならない。』ということですね。」
「そういうことだ。」

ユウキがハルの問いかけに素早く答える。

この会話を聞いてリンが言った。

「でも、それならミラボレアスの時もそうじゃないでしたか？」

「それは、あっているようであってはいないわねえ。」

リンの質問にヒトミが答えた。

「確かに、ミラボレアスの時も初見だったわ。」

「だったら…」

「でも、古文書の情報から行動を予測できたの。確かに予想外のこともあったけどね。」

「だが、今回は違う。あの老人から受け取った古文書には、ほとんどいいつついていいほど、行動を予測できる情報はなかったんだ。」

「そうだったんですね。」

「だからほとんど順調だったってことですね。」

「そうだ。」

ユウキの言葉に全員が表情を曇らせる。

「だが手がないわけではない。」

ユウキが続けた。

「やるべきことは変わらないからな。即急に装備を整えて、討伐に向かう。」

「やりましょう。」

「私たちがやらなきやいけないんだもんね。」

「そうね。」

「決まりだな。では、始めよう。」

第二章 怒れる邪龍

白いドレスを纏った謎の少女が呟いた。

「……。」

「まだかしら……。さすがに退屈なのだけれど？」

答えたのは赤い布を纏った男。

「そう慌てなざるな。じき時が来ればその退屈とやらも吹き飛ぶだろう。」

すると、少女が少々怒り気味に言った。

「そんなこと言っても……。もうどれだけ経ったと思っているの？」

「こんなに退屈なのは、あなたが勿体振っているからじゃない。」

赤衣の男は静かに答える。

「おやおや。そんなことをおっしゃらないで下さいませんか。」

しかし、少女は話を聞いていない。

「大体、なんでそんなに引きのばすのよ。」

「ああもう、私が最初にアイデアだったのに。」

「しかし、最初に行動したのはわしですから。」

「でもでもでもお」

「それに」

少女の言葉を遮って男は続けた。

「あなた様が最初に行ってしまわれたとして、ご自分で退屈しない相手を見つけれられたのですかな？」

「それは…」

「だから、わしが先に手を打ってあなた様が退屈しないようなハンターを探していたのでございます。」

「そ、そう。」

（なんだかうまく言いくるめられた感じだけだ…。まあいいわ。）

「じゃあ、あなたが見つけた『はんたー』とやらをしかとみせてもらおうわよ。」

「ええ喜んで。」

（少なくとも私にこれほどまで多くの傷をつけたのだ。弱くはないであろう。）

「…」

「…」

そして、二人は白と黒の龍へと姿を変え、虚空へとへ飛び去った。

「どうだ、進み具合は。」

ユウキがハルにいった。

「順調です。リンはちよつと手こずってるみたいですが…。」

「ちよつと、それはひどいんじゃない?」

「おわたたのか?リン。」

クエストからいつの間にか帰ってきていたリンが言った。

「もつちろん。ほら、いいでしょー。」

リンは、二人に新しい装備を見せる。

リンの新しい防具は『クシヤナXシリーズ』武器は『大剣：ドラゴンキラー』

それぞれ、クシャルダオラ、ラオシャンロンの装備である。

以前ラオシャンロンを撃退したときに報酬として受け取った素材を使った大剣だ。

クシヤナXシリーズ、鋼のような甲殻で覆われたクシャルダオラの素材を使用した西洋の甲冑を彷彿とさせる装備だ。大剣のドラゴンキラーは、古龍種に対してその真価を発揮するとても高い龍属性を持つ。

「どう?すごいと思わない?」

「ああ、かなりいい装備だ。」

「だが、咆哮を使ってくるだろうからそこは気を付けるんだぞ。」

ユウキのアドバイスにリンは頷く。

「はい、気を付けます。」

「やつほー、わたしもできたわよお。」

そういつてヒトミさんがやってきた。

「わあ、すごい。」

「でしょう、すごい大変だったのよ。」

ヒトミさんの装備は、防具が『エスカドラXシリーズ』武器は、『弓・神滅弓アル・カニア』

どちらも、アルバトリオンの素材から作ることができる。

エスカドラXシリーズは、アルバトリオンの体を覆う鋭く、そして妖艶な輝きを放つ甲殻を使用した黒を基調とした、アルバトリオンの姿を模した防具だ。

また、武器も、鋭く相手を貫くような輝きを放ち、時折妖艶な輝きが弓を伝う相手を無慈悲に貫く弓だ。

「耐性はちよつと低いけど、攻撃特化だと思えばいい感じだと思うの。」

「そうか。いいんじゃないか。」

「ユウキさんは、どんな装備ですか？」

「俺の装備か？」

ユウキの装備は、『燼滅刃シリーズ』と『ヘビィボウガン：神滅重弩アル・アロア』
武器は、ヒトミと同じくアルバトリオンの素材から作られる、黒く輝く強力なヘビィ
ボウガンだ。

燼滅刃シリーズは、数多のクエストをクリアした者のみ狩猟が許可される、
燼滅刃ディノバルドの名を冠する、炎を身にまとったような装備だ。

「この装備は、火属性耐性が高いし、守備力も申し分ないからな。」
「なるほど。確かに強いですね。」

「ハルは、黒炎王か。」

「はい。防御力もスキルもちょうどいいと思って。」

『黒炎王シリーズ』黒炎王リオレウスの装備である。

武器は、『チャージアックス：黒炎斧アムガロード』

こちらは、特殊許可クエストの黒炎王リオレウスの名を冠する天空の王者
を模した装備である。

武器も、黒炎王の素材から作った炎の力を宿した剣斧だ。

紅龍。その名は“運命を解き放つ者”を意味する。

「では行こう。」

「この新しい装備ならいける気がするわ。」

「そうだな。だが油断するなよ。」

ユウキは念を押す。

「はい。」

「伝説の黒龍を倒したんだから、いける！」

シュレイド城内

そこには、白いドレスの少女が、城の外を眺めていた。

「さて、そろそろのようね。」

「ええ。では。」

「せいぜい楽しませてね? 『はんたーさん』」

少女は微笑を浮かべ視線を四人のハンターに移した。